

子どもといっしょにつくった絵本

村 山 桂 子

私はこの春、自分の子どもの教育に専念したいという理由から、ながくつとめておりました公立幼稚園を退職いたしました。幼稚園につとめているときに、絵本を出版したことがあります。

その絵本というのは、「たろうのばけつ」「たろうのおでかけ」「たろうのもだち」（いずれも福音館）であります。これらの絵本は、考えてみれば、幼稚園の先生をしていたからできた絵本だと思ふのです。

ということ、子どもの力を借りて、子どもといっしょにつくった絵本だということです。（絵本は、絵と文とからなりたっているものですが、ここで私がつくるといふのは、すべて文章、物語の創作のほうをいっています）

もちろん、筋を組み立て、文章を書いて物語にする作業は私がするのですが、この創作活動には、いろいろな意味で、子どもたちが

参加しているのです。

では、どのように参加しているのか、「たろうのばけつ」を例にとつて、具体的にお話いたします。

この物語は主人公のたろうが、あきかんで作ったばけつを、仲よしの犬や、にわとりや、あひるや、ねこたちが、いろいろなことに利用するという、子どもらしいおもいつきのたのしさを描いたものです。物語の中のおもいつきというのは、とりもおさず、クラスの子どもたちのおもいつきなのであります。

その頃、私のクラスでは、かんづめのあきかんに、ペンキで絵をかき、それに針金で、もつところをつけたバケツの製作をしていました。この手製のばけつは、たちまち子どもたちのお気にいりになりました。できあがってからも家にもち帰らず、幼稚園におくことにしましたので、子どもたちは、それぞれお気にいりの自分のばけ

つを使ってよく遊びました。そしてどの子も、みなこのばけつを大事にしていました。

そこで私は、日頃から考えていたお話の材料に、このばけつをとりあげようと思いついたのです。

たいいていの子どもは、自分で製作した作品をあとあとでも大切にしましたが、なかには、帰りの道で捨ててしまったり、すぐにこわしてしまふような子がいて残念に思っていたので、何とかこのようなことを解消するようなたのしいお話をつくりたいと考えていたのです。

そういうときでしたから、このお気にいりのばけつは、たちまち、かっこうの素材になりました。

物語はこのようなかたちではじまりました。

たろうが、ようちえんで、ばけつをつくってきました。ばいなるぶるのあきかんに、はりがねでもつところをつけたばけつです。ばけつは、そらいろのペンキでぬってありました。そして、しろいよつとのえが、かいてありました。

たろうはうれしくて、さっそくおかあさんにみせました。

「おかあさん、じょうずでしょう！ ほくのつくったばけつ」

おかあさんは、めをまるくしていました。

「まあ、たろうがつくったの。ほんとうに、じょうずにできたこと」と

たろうは、よけいうれしくて、ねこのみーやにもみせました。「すてきだろー！ ほくのつくったばけつ」

「へーえ、たろうちゃんがつくったの。ほんとにすてきなばけつだなあ」

たろうは、まえよりももっと、もっとうれしくなって、にわへおりにていきました。

以下これのくりかえしで、犬のちろー、あひるのがあこ、にわとりの、こっくに、みせてまわります。

これで、たろうが自分で作ったばけつを、どんなに気にいっているか、また大事なものであるかがわかります。

物語の進展としては、このあと、犬やあひるやにわとりやねこたちのうちだれかが、それを借りて、その大事なばけつをなくしてしまうということになるのですが、ただ借りていってなくしてしまうというだけでは、おもしろくありません。そこで、子どもたちが実さいに、ばけつをいろいろなことに使っていることからヒントを得て、動物たちが、それぞれ、ばけつを何かに利用するために借りにくるということにいたしました。

つぎのひでした。

たろうが、よつとのばけつをもって、にわをあるいていると、にわとりのこっかがやってきていました。

「たろうちゃん、すまないけど、そのばけつかしてくれない？」

たろうはびっくりして、どうしようかとおもいました。

「ねえ、よっとのばけつ、なにするの。らんぼうにするならかさな
いよ」

「いいえ、らんぼうになんかしませんよ。ともだちのところへ、お
きゃくにいくの。はんどばつぐにしたいのよ」

「ぼくのばけつをはんどばつぐに。じゃあ、かしてあげる。でも、
だいじなばけつ、はやくかえしてね」

こっちはよろこんで、ばけつをかりていきました。

それからまもなく、

「どうもありがとう」

こっちは、ばけつをかえしにきました。

以下、これのくりかえしで、つぎにはあひるのがあこが、そのつ
ぎには、犬のちろーが、そしてねこのみーやが、かりにくるわけ
です。これらの動物たちのばけつの利用法については、クラスの子
どもたちに、大いに想像力を發揮してもらいました。

その結果、あひるはひよこを水させるために、犬は散歩のとき
の帽子に、そしてねこは、ころころまりのかわりに、ばけつを使う
ことに決めました。

さて、いよいよおおづめです。

いちばんおしまいに借りていったねこが、ばけつをなくしてしま
いました。

ねこのみーやは、ばけつをかえしてくれないのです。

「ぼくのばけつ、どうしたの？」

たろうは、なきそうになってきました。

「ごめんさい。ごめんさい。ころころころがしているうちに、
えんがわからおちて、どこかへ、みえなくなりました」

「それはたいへん。それじゃ、すぐにさがさなくちゃあ」

たろうは、えんがわのほうへかけていきました。

みーやも、かけていきました。

「わたしたちもさがしてあげよう」と、こっことも、があこも、ち
ろーも、かけていきました。そして、みんなでいきました。

「よっとのばけつはどこだー」

もちろん、ばけつはみつかりません。そしてめでたし、めでたしと
なるわけですが、ここで、また、もうひと工夫しなければつまりま
せん。

「ばけつは、いったいぜんたいどこへいったの」

その質問を、子どもたちは真剣に考えてくれました。

「みーやが、えんがわから落ちちゃったんだから、庭のところじゃ
ないの」とか、

「おかあさんか、だれかひろってあるんじゃないの」などと。

「そうね、おかあさんよ、きつと。おかあさんも、もしかしたらた
ろうちゃんばけつを、何かに使っているかもしれないわよ」

私がさういうと、子どもたちは、たちまち、

「つかっている。つかっている。」

「お花さしてんの」そっと、こんなことをいった女の子がおりました。なんとという、いい考えでしょう。

この物語の結びはできあがりしました。

「よつとのばけつは、どこだー」

すると、おかあさんがきて、いいました。

「ここよ、たろうのばけつは、えんがわのしたにおちてたから、かびんのかわりに、おはなをさしたわ」

みると、まどのところに、たろうのばけつがありました。

まっかなぼんぼんだりやが、きれいでした。

「ああ、よかった」

たろうとみーやが、いいました。

「よかったねえ」

こつこも、があこも、ちろーも いいました。それから、たろう

が、とてもうれしそうにいいました。

「おかあさんまで、ぼくのばけつかりてるよ」

このようにして「たろうのばけつ」のお話はできあがったわけですが、できた作品をみて、私が何よりも満足したことは、はじめにねらっていた『製作した作品を大事にしましょう』というような、とかく押しつけがましくなりがちなテーマが、どこにもむきだしの

かたちで、でていなかったということです。

ですから、たろうのばけつは、ばけつをいろいろに使っていくおもしろいもののしきを、えがいたものと思っていたただけでもないのです。この絵本をみた子どもたちが、たろうのばけつをすてきだな、いいな、と思い、たろうがばけつをどんなに大事にしているかと感じてくれれば充分だと思っています。

スペースの都合で、「たろうのともだち」「たろうのおでかけ」についてはお話できませんが、このようにテーマをむきだしにしないということでは、やはり大変努力をいたしました。というのは、これらは、「たろうのばけつ」より、さらにはっきりと生活指導をねらったものだからです。即ち「たろうのともだち」ではいばってはいけないということを、「たろうのおでかけ」では交通道徳をねらっているのです。

あとになって、これらのお話が絵本になった大きな理由を考えてみると、

○生活指導をねらいながら、教訓的なこと、おしつけがましいことをさけるように努力したこと

○子どもといっしょになって、子どもの心になって、つくったこと、ではなかったかと思うのです。

何といっても絵本はたのしいものでなければならぬのです。

この次には、生活指導ではなく別な面からもっとたのしい絵本をつくりたいと考えています。